

## わき・陰部の湿しん 竜胆瀉肝湯が効果

**Q** 三十一歳、男性。湿しんが出やすい体質で、

特に梅雨時から真夏にかけてわきの下や陰部を中心にかゆみが強くなり、かいたあとが赤黒く変色します。外用薬を使っていますが、酒を飲むと猛烈なかゆみにおそわれ、血の出るまでかきむしつてしまいます。

**A** 質問者は身長一七六cm、体重八八kgと肥満傾向。手足や首に汗が出やすく、のどが渇きやすく、夏は常に水分をとりたい気持ちになること。このような状態は漢方では「湿」が体にたまりやすい体質と考える。

こうしたタイプは首のまわり、わきの下、腰まわり、陰部周辺などに発しんがでやすい。アルコールを飲むと皮膚の赤みが増し、かゆみ

刺激が強くなる。この状態は漢方では「湿熱」が体内に蓄積されている病態と解釈する。

この体質の湿しんにもっともよく使われる漢方薬は竜胆瀉肝湯（りゅうたんしゃかんとう）である。体内の湿熱をさばく薬で、特に難治性の陰部瘙痒（そうよう）症に頻用される。いわゆる「いんきんたむし」にもよい。このタイプの人は総じて、肉類や甘いものを過剰にとる傾向があるので、食生活など日常生活の見直しも必要である。

そのほか皮しんの状態や全身状態に応じて防風通聖散（ぼうふうつうしょうさん）、越婢加朮湯（えつびかじゆつとう）、消風散（しょうふうさん）、十味敗毒湯（じゅうみはいどくとう）などが使われる。